

---

# 元勇者、今は雪花の魔師

紅葉貴久弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

元勇者、今は雪花の魔師

### 【Nコード】

N5534Z

### 【作者名】

紅葉貴久弥

### 【あらすじ】

『雪花の魔師』

それは己すら凍てつかせる者の名。

それと同時に、誰よりも温かい者の名。

彼は勇者と言う座を捨て、逃亡。平穏無事に過ごしていたが……魔王が出てきてさあ大変。

現勇者と共に魔王討伐へ出るも……どうにかして怠惰に過ごそうとする彼は一体？

## 第一話 怠情が崩れた（前書き）

長続きしない作品をリリース！

長続きできるのか？この猛者が集う中で私めの様なひよっこが……！

## 第一話 怠情が崩れた

最初に言っておこう。これは異世界の話だが、勇者なんて出て来ないし、ましてや他の世界から誰を呼び出し勇者だー！なんてさせる気は全くない。

ただ、俺の怠情な生活だけを送る物がた「師匠！」ああつ、弟子が俺のスバラスィ 前振りの邪魔をしてくる……。

「師匠！ゆ、勇者が呼び出されました！」

「はあっ！？」

俺はベツトから落ちた。いやもう、それは情けなく転がり落ちた。というか、俺の前振り完全無視ッ！？

弟子はそんな俺のもとへ慌てて駆け寄る。そして、王家の紋を持ってきて来て、俺に見せる。

まさか……

「師匠、元勇者だったんですね！」

「言っなあー！」

ギエル・ドリユー（偽名）で別名『雪花の魔師』な俺はごく一般的な大学生だった。

元の名前はもう捨てた。元の世界へは帰れないと悟ってしまったからだ。

俺が呼び出された理由はクソがつくほどふざけんなッ！な、内容だった。

『我が国の危機に救世主が来て下さったぞ！』

「はあ！？」

『さあ、救世主様あの国を潰してくださいさ』  
「頭湧いてんのじゃね？アンタら！」

この会話で理解してほしい。理解できねえよだアホ。って方は下を読めばわかるはずだ。

いや、わかってほしい。切実に。

とにかく、隣の国に喧嘩売られました。はい、買いました。劣勢になりました。負けそうだから異世界人召喚…… ホント、湧いてるよねえ、この国の人々の頭。

で、俺はなんか知らんが戦うことになって、そうしてついたのが二つ名が『雪花の魔師』

理由？それはおいおい、というか後回しにして…… まさか、またやったのかよ王家の皆さまよお。

ああー、ダリイ。働くのヤダ。俺っち死にたくないもん。  
つか

「今回の理由はなんだって？」

「魔王っす」

「魔王…… おお！魔王！へえ。って、魔王！？」

「どうしたんですか？いきなりそんなにコロコロ表情変えて……」

おい弟子。師匠をちょっと危ない感じで見るな！

と……それはさておき魔王。魔王ねえ。うん、王家の全員が土下座しに来たら、討伐に行つてやろう。

で、

「なんで王家の紋持ってたんだ？」

「そうだ！聞いて下さいよ、師匠！俺、魔王討伐のメンバーに選ら

ばれたんですよ!」

「そうかそうか。ちよつと待ってろ、エルクライム潰してくるわ」

「なんでっすか!?! 師匠まで魔王になっちゃいますよ?」

「ははは。アホか、俺は『雪花の魔師』だぞ?」

「そうですよねえ、そんなことするわけが……」

「潰すと言ったら潰す」

「……………」

固まってるじゃねえぞ弟子。お前にや言っていないが俺はあの国に恨みがあるだよ! それはもうたっぷりと……全部私怨だけだな。

俺がこのままエルクライムを潰そうと、立ち上がり、ドアに手を駆けようとした瞬間にノックがした。

「はい、どなたでしょうか?」

「あの、隆介様」

そこには何時ぞやの、俺を呼びだした王様の一人娘……ティーナがいた。

俺は空を仰いだ。

今日はいい天気だな。

## 第一話 怠情が崩れた（後書き）

感想、意見待ってます。

第二話 魔王だかなんだか知らねえが、俺たちが倒してやるよ（前書き）

わーい、いきなりバトル！  
グダグダだあー！



## 第二話 魔王だかなんだか知らねえが、俺たちが倒してやるよ

「あのっ、隆介様？」

「ティーナ……その名で、呼ぶな」

自分でも驚くくらいに低い声で言葉が紡がれる。

それを聞いたティーナは少し俯いてしまった。

それを見て弟子が俺を睨む。

「師匠！」

「んだよ……お前には行っていないが俺はな……」

「その先は私が言いますっ！」

「……ティーナ」

「姫……」

ティーナは語りだした。

俺を呼びだした事を、俺は今で言えば、勇者という立ち位置にいた事を、今の勇者を超える強さを持つ事を、そして、公には死んでいく事を……。

それを聞き、弟子……名前を、ミズキ・ドリュウという。

ミズキは顔を顰めた。

「なんで師匠はこんな山奥にいるんです？」

「それは……父たちが」

「俺を恐れた。というか、俺がただ単に静かに過ごしたただけだ」

「そんな……」

ミズキは顔を顰めるどころか、その顔には嫌悪感を丸出しにしていた。

そして、それらの感情は全て、ティーナに向かった。

俺は苦笑しながら、愛している者たち《……………》を見ていた。

幸せ。

そんな言葉が頭に出てきた瞬間、魔力の流れを感じた。

それはこの家に向かって放たれる。

二人は気付かない。

だからこそ、静かに、自らの手を挙げた。

詠唱は破棄し、速度だけを求める。

『氷雪』

それだけで、魔力は俺の放った魔術で凍りついた。

「なんの、用だ？」

ティーナに発したモノより低く、重い声。

それでやっと敵に気付いたのか、二人は臨戦態勢に入る。

「おい。ミズキ、ティーナ。後で一から鍛え直してやるからな」

「嘘でしょっ、師匠？」

「あのっ、隆介様……？」

二人は顔を引き攣らせる。まあ、当然か。

地獄より、辛い目に会うのだから。

そんなことを一瞬、頭の片隅で思い、ドアを見つめる。

だが、ドアは開かずに襲撃者が現れた。

「ちい、あのクソ魔王。女王とその番犬がこんな強いなんて聞いてねえぞ」

まあ、そいつはいきなり魔王の罵倒を始めましたけどね。

襲撃者の髪の色は金髪で、整った顔立ちをしている。もちろん体は細身ながらも鍛えられている。

だが、それだけなら王家の兵士と言われれば納得できる。

しかし、男の腕は龍のような刺々しい形をしており、耳は尖っている。

「なるほど、魔族……という奴か」

「ふー、『魔族』なんてひとくくりにしなくてくれ、俺は竜人族だ」

「悪いな、俺は浮世の事には疎くてな……竜人のことなど知らん」

「そうかい。なら、一応名前を教えておこうか？」

「そうしてくれると楽だ、竜人」

竜人と俺は睨み合う。

そうしながらも、竜人は口を開く。

「俺はガイエル。ガイエルⅡアグシス。そして、赤竜の唯一の生き残り」

「俺は、ギエル……いや、ゆきはらうりゅうすけ雪原隆介……こっちで言うならば、リュ

ースケ・サカイだ」

「さて、お互い自己紹介が終わったな。一つ言い忘れていたが、俺たち赤竜の竜人に名乗るってことはそのまま、決闘を意味している。これが意味する事がわかるか？」

「…………ふっ」

「「答えは、殺し合いだ！」」

ガイエルが動く、それを隆介は跳ねるように横へと避ける。  
避けられた拳は止まることなく、隆介の家を粉々に吹き飛ばす。隆介は顔をしかめながら、ミズキとティーナを抱え、家を脱出する。家が無くなったそこは少し開けた広場へと戻り、そこに向かいあうように立つ四人。

今度は、隆介の方が動いた。

「『障縛壁』」

「あつ！ちよつと、師匠！」

「隆介様！」

ミズキとティーナは隆介の使った魔法で閉じ込められた。  
ガイエルと一騎打ちするために……。

「いいな！そういうの！燃えるじゃねえーかつ、リユースケ！」

「無駄口はいらないっ！こいつ！ガイエル」アグシス！」

「遠慮なくっ！『爆撃掌』」

ガイエルの掌が地面に触れる、と同時に連鎖的な爆発が隆介の方に迫りくる。

「断ち切れ、アイスクロー『氷爪』」

隆介の前には言葉通りに研ぎ澄まされた氷の塊が三つほど現れた。  
しかし、それは『爆撃掌』の爆発の熱と風には勝てずに、融け去る。  
爆発が迫る。だけどそれは、隆介には届かない。

「『氷刀・雪花』」

いや、届きはしたが、爆発は彼らの目の前で氷の花となった。

『氷刀・雪花』を振る隆介の手によって……。

「はっ！いいじゃねえか！お前を、そのちゃんな剣ごと燃やしつくしてやるぜ『狂炎の息吹』！」  
バサーク・フレイムブレス

「剣じゃない、刀だ。ガイエル」アグシス！」

ガイエルは大きく息を吸い、一気に炎を吐き出す。

その炎は本来ならすぐ燃える事の無い夏の樹木を一瞬で消し炭にして、踊り狂う恐怖として隆介に襲いかかる。

だが、その炎も次の瞬間には舞い落ちる雪と共に凍り、砕け散る。

その風景はまるで雪花が舞い落ちるかの如く、妖しく美しい。

「雪原抜刀術・一式『雪月花』」

「なっ！」

「これで、終わりだ。ガイエル」

炎を凍らせた彼の一闪は、簡単に己の周りを凍らせる。

敵は当然。他にもくすぶりを残す炎も、自らはった結界も、そして己自身も……彼を畏怖する名称の『雪花』は凍らせる。

その中で唯一の敵のガイエルが生き残ったのは奇跡だと言えよう。

「一つ言っておくぞ」

「……………」

「魔王だかなんだか知らねえが、俺たちが倒してやるよ」

こうして、雪原隆介といまだに登場しない勇者の物語は始まった。

その後……

「おいっ！隆介！」

「なんだ？」

「なんで俺を殺さねえ！？」

「無駄に命を奪うのは嫌いなんだよっ」

「お前は、竜人の誇りを侮辱するのかっ！」

「んなつもりはねえ、ただ」

「ただ？」

「ただ、お前は赤竜唯一の生き残りなんだろう？なら、その役目を果たせ。その後にもう一度戦ってやるよ」

「上等だ！逃げんなよっ！」

「逃げねえよ！」

何故か、ガイエルが仲間になっていたりする。

**第二話 魔王だかなんだか知らねえが、俺たちが倒してやるよ（後書き）**

感想・ご意見待ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5534z/>

---

元勇者、今は雪花の魔師

2011年12月20日16時49分発行